二〇二三年度　三田学園高等学校入学試験問題

国　語

〈注意〉各問題の解答はすべて解答用紙に書き入れなさい。

※出題の都合上、漢字にふりがなをふる、漢字をひらがなにするなど、本文の一部に改変を行っています。

※特に指示のない限り、字数制限のある問題では句読点や記号も一字として数えます。

受験番号	

一、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

まず、人が仕事を与えられる時、自分はなにをしているのかがわからなければならない。仕事そのものの内容ではなく、その仕事が会社という組織体の中でどのような位置を占め、いかなる役割をになっているかを知らなければならない。

[A]、なんのためにこの仕事が必要であるのか、と質問して、お前はそんなことを知る必要はない、ただ命じられたことをやっていさえすればいいのだ、と答えられたとしたら、彼は侮辱(ぶじょく)されたと思うだろう。人格を傷つけられたと感じるだろう。なぜなら、彼は機械として会社に購入されたわけではなく、人間として職場で働いているからだ。

①そのような意識を持たせないために、会社は新入社員に対して教育を行い、現場実習に参加させ、企業体の成り立ちについての理解や、製品に関する知識を与えようとする。

ところが、ことはそう簡単には運ばない。たとえば、自動車のメーカーは自動車を生産している。しかし、一人の人間が一台の車を始めから終りまで作っているのではない。細分化された、部品、集成部品(注1)、集成組立(くみたて)、全体組立、艤装(注2)、aトソウなどという製造工程のどこかの一端に参加して働いているに過ぎない。別の分け方をすれば、エンジン廻(まわ)り、足廻(注3)り、ボディー廻りなどのいずれかの職場に属して作業をしている。いうところの（　Ⅰ　）である。

具体的には、一人の人間は機械加工を担当してネジを切っているのであり、プレス(注4)で板金を押し曲げているのであり、エンジン搭載(とうさい)のナットをbシめつけているのである。たとえそれらの工程が自動化され、コンピューターによってコントロールされるロボットが実作業を行うとしても、一人の人間はいずれかの職場に属してロボットの仕事を管理しているわけである。

いかなる作業者も、自分で直接自動車の全体を作っているのではない。極言(注5)すれば、自動車メーカーに（　Ⅱ　）など一人もいはしない。ただ、自動車のほんの一部分を作る仕事に参加している人々が存在するだけなのだ。かつて現場実習で工場を廻っている時、眼(め)の前で作られる個々の部品が完成された自動車のどの部分に使われるのか、ぼくには見当もつかなかった。質問すると班長は図面をとり出して説明してはくれた。[B]職場に配られている図面は、個々の部品の寸度(注6)を示すものか、せいぜいその種の部品が幾つか集められてできあがるアッセンブリー（集成部品）の組立図面までであり、完成された自動車の姿とそれらの部品とを結びつけて考えるのは、ぼくには容易なことではなかった。

[C]、それは新入社員であるぼくが自動車の構造についての知識にcトボしかったがために起った事態ではあったのだが、しかし考え方によっては、各職場の作業者の頭には、むしろ完成品としての自動車より、眼の前の部品の方がより大きなウェイト(注7)を占めているのだともいえるだろう。しかも、同じ部品をそれだけひたすらに繰り返し作り続けているとすればなおさらである。つまり、彼は自動車を作っているのではなく、部品を作っているのだ。中世の職人が時間をかけ、手間をかけて一足の靴(くつ)を作りあげる仕事や、農民が畑を耕して種をまき、肥料をほどこし、土寄せをして育った農作物を収穫する営みに比べれば、現代の工場における労働がどれほど【　Ｘ　】し、かつ【　Ｙ　】なものになっているかは明らかだ。

ぼく自身の小さな経験に即してもそのことはいえる。これはまだ学生時代だが、ある団体の仕事を手伝っていた一時期がある。時折、そこで大量の印刷物を発送する作業を依頼された。作業の内容は、印刷物を折りたたみ、封筒に宛名を書き、切手をはり、印刷物を中に入れ、封をして郵便局に運ぶといったものだった。

最初、一枚一枚印刷物を折りたたみ、封筒に宛名を書き……という作業をぼくは一通ずつ丁寧に繰り返していた。するとそれを見た事務のベテランが、そんなやり方をしていたのでは時間がかかって仕方がない、と要領を教えてくれた。印刷物は二十枚くらいずつ重ねて折り、封筒の宛名は d メイボからまとめて書き写し、切手をはるには細長く切り離した十枚続きのものを一度に海綿で濡らしてちぎりながらはりつけ、封をするのは封筒を少しずつずらして並べた上にはけで一気に糊をぬってから先端を折り曲げてつければ、能率があがるのだという。忠告のままに実行すると、仕事は確かにはかどった。

そのうち、二、三人の学生が来て仕事に加わった。②印刷物を折りたたむ者、宛名を書く者、切手をはって印刷物を中に入れる者、封をして発送可能となった封筒を箱に並べる者、と仕事は分担された。人手がふえた以上に、能率は驚くほどあがった。作業が細分化されるほど同一動作の繰り返しが多くなるのだから、慣れも早くなり、スピードがあがるのは当然である。

その結果、二つのことが起った。一つは作業量が増したためもあって著しい疲労を感じるようになった。もう一つは、自分が印刷物を発送しようとしているのだという意識が薄れ、折ったり書いたりする作業に注意を集中する傾向が生れた。［D］、その分だけ、あるメッセージを伝えるはずの郵便物はぼくから遠ざかっていった。考えてみれば、これは最も素朴な形における分業の経験であった。一時的なアルバイトであったから、肩が熱くなるような疲労にも、繰り返しの作業にもぼくは耐えられたけれど、もしもあれが日常的に続く仕事であったなら、途中で悲鳴をあげてしまったかもしれない。

しかし、分業の実態とはまさにこのようなものであるだろう。封筒の発送はすこぶる簡単な作業であり、しかもせいぜい三、四人の小集団の仕事だから大した問題ではないのだが、これが大組織による日常的業務となればことは深刻となる。

細分化された単純な労働の繰り返しは確かに仕事の能率をたかめるけれど、一方で一人の人間にとっての労働の姿を歪めずにはおかない。眼の前の仕事にすべてのエネルギーを吸いとられ、全体として自分が今なにをしているのかが彼にはわからなくなってしまう。それがわからずに、本当の働きがいの感じられるわけがない。［E］、現実の仕事は単純な作業の反復なのである。

ある座談会の席上でこんな話を聞いたことがある。③アポロ八号に乗って月に行ったアメリカの宇宙飛行士が、多数のワッペンをロケットに積みこんでいたというのである。地球に帰還した飛行士は、ロケットの製造に参加した各工場を訪れ、あなたのおかげで月を廻って来ることが出来た、と言ってそのワッペンを工場の作業員に配ってあるいたといわれる。

一種の宇宙みやげとでも呼べそうなこのワッペンをめぐるエピソードは、しかし案外深刻な現代の影を孕んでいるのかもしれない。巨大なロケットを作りあげるために限りなく細分化された労働の中で、自分がなにをしているのかを見失ってしまった作業員達に、その労働の全体の像を外側からなんとかして与えようとする苦肉の策としてこのアイデアを受け取るのは見当違いであろうか。

本来、人々の生活に役立つものを作りあげるための労働が、労働それ自身の中で自らの全体像と目的を喪失(そうしつ)しているのが現状であるといえるだろう。

（黒井千次『働くということ』より）

注1　集成……たくさんのものを集めて、一つにまとめあげること。
注2　艤装(ぎそう)……自動車製造の過程でインパネ（ダッシュボード）・シートといったパーツを装着すること。
注3　足廻り……自動車の車輪および車輪を支える装置（サスペンション）の俗称。
注4　プレス……圧力を加える機械。
注5　極言……極端に言うこと。
注6　寸度……サイズ。
注7　ウェイト……重要度。

問一　――部a～dのカタカナを漢字に改めなさい。

問二　空欄 A ～ E に入る最も適当な言葉をそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度以上用いてはいけません。

ア　しかし　　イ　しかも　　ウ　つまり　　エ　もし　　オ　もちろん

問三　――部①「そのような意識」とは、どのような意識ですか。三十五字以内で説明しなさい。

問四　空欄（　Ⅰ　）にあてはまる熟語を抜き出して答えなさい。

問五　空欄（　Ⅱ　）を補う表現として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　全作業工程を理解している人　　イ　自分の作っている部品の名前を知っている人
ウ　自分の仕事の役割を理解している人　　エ　自動車を作っている人

問六　空欄【　X　】・【　Y　】に入る言葉として最も適切な組み合わせのものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　X＝全体化　　Y＝直接的　　イ　X＝部分化　　Y＝間接的
ウ　X＝単純化　　Y＝非現実的　　エ　X＝複雑化　　Y＝現実的

問七　――部②「印刷物を…分担された」とありますが、これと対照的な労働をする人を本文中から二つ抜き出して答えなさい。

問八　――部③「アポロ八号に乗って月に行ったアメリカの宇宙飛行士が、多数のワッペンをロケットに積みこんでいた」とありますが、その行為にどのような意味があると筆者は考えていますか。六十字以内で説明しなさい。

二、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

僕らはひとけのない墓地下のカーブで、凩に慄えながら花電車[注1]を待った。

そこはまったく写真撮影に適さない場所だった。第一に、街灯のほかの灯りがない。後ろは青山墓地、向かいは米軍[注2]キャンプである。しかも四方を繁みに囲まれているそのあたりは、霞町の名の由来のごとく、夜更けとともに霧が湧く。何よりも、停留場も交叉点もないカーブを、都電[注3]は全速力で駆け抜けるのである。

「青山一丁目の方が、よかないですか」

と、父は機材を出しためらいながら言った。

「よかねえよ。俺ァここしかねえって、せんから決めてるんだ」

凩にかき乱された霧が、街灯の輪の中で渦を巻いていた。父が仕方なしに機材を拡げる間、祖父はステッキに両手を置いてキャメル[注4]の両切を唇の端で噛んだまま、真剣なまなざしをあたりに配っていた。

まさかと思う間に、ちらちらと雪が降ってきた。

「やっぱ、むりですよおやじさん――」

「けっこうじゃあねえかい。ほれ、おめえの尊敬する何とかいうベトナムのカメラマンは、鉄砲の弾ん中でシャッターを切ったんだろう。あれァいい写真だ。おそらく奴ァ、弾が飛んでくるたんびに、しめたと思ったにちげえねえ。プロってえのァ、そうじゃなきゃならねえ」

「①そりゃま、そうですけど……」

心のやさしい父は、ここまで準備を整えた祖父の［　　］とも言える写真が、無残な結果に終わることを惧れたにちがいなかった。

それからしばらくの間、父は心の底から祖父を②諌め続けた。祖父は頑として譲らなかった。真摯な師弟のやりとりに、僕や母の③口を（　　）余地はなかった。

結局、父は強情な師匠に屈した。

「せめて、こっちを使っちゃくれませんか」

父はフラッシュをセットしたペンタックス[注5]をさし出した。

「いや、俺のを使う。ただし、おめえもそっちで、同時にストロボ[注6]を焚け。合図は昔と同じだ」

わずかの間に、雪はほぐれ落ちる真綿ほどの大粒になっていた。祖父は掌で[注7]ライカのレンズをかばいながら、父の立つべき位置を指図した。

深いしじまの中で、都電の警笛が鳴った。隣りの新龍土町の停留場を発車したにちがいない。道路の向こう岸には、いつの間にか大勢のGI[注8]が見物にやってきていた。

「おじいちゃん、写せるかなあ。ストロボ替えてる暇なんかないよ。ここ、すごいスピードで来るんだ」

母は答えずに、じっと夫と父の仕事を見つめていた。

ストロボは一回で焼き切れてしまう。玉を替える間などあるわけはないから、写真は一発勝負だった。

祖父はハンチング[注9]の庇を後ろに回し、街路樹の幹に肩を預けた。両肘をぐいとしめ、何度もファインダー[注10]を覗きながら足場を定める。ふだんの老耄[注11]した姿など嘘のように、腰も背もしゃんと伸びていた。

一方の父も真剣だった。指示通りに少し離れた場所で三脚を開き、毛糸の帽子を脱いでカメラをかばっている。

緊密な時間が刻まれた。雪を吸って真黒に濡れた道路に、水銀を流したような二本の線路がはるかな弧を描いていた。

母が背中から僕を抱きすくめた。僕の鼓動と同じくらい、母の紬の胸は高鳴っていた。

花電車が来た。

向こう岸のGIたちから、いっせいに喝采と指笛が起こった。

全速力でカーブに現われた花電車は、クリーム色のボディが見えないほどの造花で飾られ、フレームには目もくらむほどの豆電球を明滅させていた。ヘッドライトの帯の中に霧が渦を巻き、轍からは雪が吹き上がった。

「まだっ！まだまだっ！」

祖父が怒鳴った。

「いいかっ！」

「はいいっ！」

ひと呼吸おいて、祖父は木遣り[注12]でも唄うような甲高い合図の声を張り上げた。

「ああっち！　ねええっ！　さん！」
一瞬、夜の底に焼きつけられた都電の姿を、僕は一生忘れない。
二台のストロボと同時に、都電のパンタグラフ[注13]から稲妻のような青い火花が爆ぜた。真昼のような一瞬の閃光の中で、電車はそのまま止まってしまったように見えた。
しかし、都電は警笛を鳴らし続けながら、全速力で僕らの前を通過していたのだった。豆電球に飾られた運転台に、順ちゃんが無愛想な顔でつっ立っていた。
母が、ほうっと息を抜いた。
「あっち、ねえ、さん、だって。久しぶりで聞いたわ」
「あっちねえさん。おかしいね」
④僕と母は芯の折れたように屈みこんで、大笑いに笑った。
都電が行ってしまってからも、祖父と父はファインダーから目を離さずに立っていた。
少し間を置いて、向こう岸からGIたちの喝采が上がった。それはカメラマンたちに向けられた賞讃に違いなかった。祖父はようやく身を起こし、ハンチングを粋に胸前に当てて、
「サンキュー・ベリマッチ！」と答えた。
「撮れたの、おじいちゃん」
僕は祖父に駆け寄った。
「焼いてみりゃわかる。まちがったって暗室のドア開けたりすんじゃねえぞ」
祖父はライカをケースに収めると、ツイード[注14]の背広の肩に斜めにかけ、雪と霧に染まった墓地下の舗道を、さっさと歩き出した。
「気が済んだかな」
三脚を畳みながら、父が悲しげに言った。
祖父は誇らしく胸を反り返らせ、無愛想に、まるで花道をたどる役者のような足どりで、雪の帳の中に歩みこんで行った。
その夜、僕と父は夕飯もそっちのけで暗室にこもった。
赤ランプの下の父の顔はいつになく緊張していた。
「おとうさんのフィルムは？」
父は少し迷ってから言った。
「⑤ペンタックスのフィルムは抜いておいた」
「え、どうして？」

「ペンタックスが写っていて、ライカが真黒だったら、おじいちゃんガッカリするだろう。おとうさんの方は失敗してたことにしとけ」
「おとうさん、やさしいね」
「おじいちゃんは、もっとやさしいよ。較べものにならないくらい」
話しながら、僕と父はあっと声を上げた。現像液の中に、すばらしい花電車の姿が浮かび上がったのだった。
「すごい、絵葉書みたい」
父は濡れた写真を目の前にかざすと、唇を慄わせ、胸のつぶれるほどの溜息をついた。
「信じられねえ……すげえや、こりゃあ」
暗室から転げ出て居間に行くと、祖父と母は勝手にケーキを食っていた。
父と僕のあわてふためくさまをちらりと見て、祖父はひとこと、「メリー・クリスマス」と言った。家族が大騒ぎをしている最中にも、まるで当然の結果だと言わんばかりに、焼き上がった写真を見ようともしなかった。
「まあ座れ。戦に勝ったわけでもあるめえに、万歳はねえだろう」
僕らは尊敬する写真師、伊能夢影を中にして、炬燵にかしこまった。
まったく芝居のように長い間をとって紅茶をすすり、両切のキャメルをつけてから、祖父は言った。
「ベトナムのカメラマンはうめえよ。俺よりゃちょいと下がるが、おめえよりかはうめえ」
「当然です、おやじさん」
と、父は誇らしげに答えた。
「なら、なぜおめえがへたくそか、わかるかえ」
「機材に頼るから、でしょうか」
「いいや、そうじゃあねえ。少なくともおめえのペンタックスは、俺のライカよりか優秀なカメラだ。あの露出を計る機械にしたって、あるのとねえのとじゃあ、大違えだろう――要は、ここだ」
と、祖父は丹前[注15]の胸に掌を当てた。
「きれいな景色を撮るのもけっこうだが、景色にゃ感情てえものがねえ。おめえの撮る写真は、道具さえ揃や誰だって撮れる。つまり、おめえはやさしさが足んねえ」
⑥はあ、と父は押し黙った。

注1　花電車……装飾の施された車両のこと。
注2　米軍キャンプ……米軍基地のこと。

（浅田次郎「青い火花」より）

注3　都電……東京都内を走っていた路面電車。
注4　キャメルの両切（りょうぎり）……タバコの種類。
注5　ペンタックス……カメラのメーカー。また、ペンタックス社製のカメラのこと。
注6　ストロボ……写真撮影の時に用いる、光度の高い放電管。
注7　ライカ……カメラのメーカー。また、ライカ社製のカメラのこと。
注8　GI（ジーアイ）……米軍兵のこと。
注9　ハンチング……帽子の種類。
注10　ファインダー……カメラにおいて撮影前に目で構図を決めたりピントを合わせたりするのに使用する覗（のぞ）き窓。
注11　老耄（ろうもう）……年をとって弱ること。
注12　木遣（きや）り……労働歌の一つ。
注13　パンタグラフ……電車が電気を受け入れる装置で、屋根上に設置されている。
注14　ツイード……毛織物の一種。
注15　丹前（たんぜん）……防寒着の一種。

問一　本文を二つの段落に分けるとすれば、第二段落はどこから始まりますか。最初の五字を抜き出して答えなさい。

問二　――部①「そりゃま、そうですけど……」から読み取れる心情の説明として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　祖父のプロカメラマンとしての技術を認めつつも、シャッターを切る体力すらないので、どうにか撮影を中止したい気持ち。
イ　祖父のプロカメラマンとしてのあり方に賛同しつつも、撮影が失敗に終わるのが目に見えているので、どうにかやめさせたい気持ち。
ウ　祖父のプロカメラマンとしての姿勢に共感しつつも、準備不足で臨もうとしているので、どうにか撮影を中断したい気持ち。
エ　祖父のプロカメラマンとしての姿勢を理解しつつも、老朽化した機材では限界があり、新しい機材で撮影させたい気持ち。

問三　空欄［　　］に入る最も適当な言葉を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　一世一代　　イ　心機一転　　ウ　天衣無縫　　エ　正々堂々

問四　――部②「諌め続けた」とはどういう意味か、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　慰め続けた。　イ　叱責し続けた。　ウ　注意し続けた。　エ　ののしり続けた。

問五　――部③「口を（　　）」について、空欄に適当な語句を補い慣用的な表現を完成しなさい。

問六　――部④「僕と母は芯の折れたように屈みこんで、大笑いに笑った」について、

Ⅰ　この時の「僕」と「母」の様子として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　張り詰めた緊張の中での撮影から解放され、一息つくとともに、祖父の言葉の意味が分からず、滑稽（こっけい）に思っている。
イ　写真撮影の失敗を確信し、落胆するとともに、その思いを祖父に悟られないよう、二人で示し合わせて平静を装っている。
ウ　写真撮影をひとまず終え、胸をなでおろすとともに、焼き上がりを心配しつつも、表面上は平静を装っている。
エ　タイミングを逃さず、ひとまず花電車を撮影することができて安堵（あんど）するとともに、祖父の言動をほほえましく思っている。

Ⅱ　これとは対照的な「僕」と「母」の様子が描かれている連続した二文を、本文中から抜き出し、最初の五字を答えなさい。

問七　――部⑤「ペンタックスのフィルムは抜いておいた」とありますが、何のためにそのようなことをしたのですか。五十字以内で説明しなさい。

問八　――部⑥「はあ、と父は押し黙った」とありますが、この時の「父」の様子として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　見事な撮影をし終えた祖父を誇らしく思いつつも、祖父に機材について非難され、納得できないでいる様子。
イ　見事な撮影をし終えた祖父を目の前にして、祖父からの撮影姿勢についての助言に、何も言い返せない様子。
ウ　見事な撮影をし終えた祖父に恐縮しつつも、一からプロ写真師として出直そうと決意を新たにしている様子。
エ　見事な撮影をし終えた祖父に驚嘆しつつも、祖父という越えられない壁に直面して、気を落としている様子。

問九

本文の表現の特徴として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　祖父の会話文に方言を多用することで、祖父の頑固で昔気質（むかしかたぎ）の雰囲気を醸（かも）し出している。

イ　回想の形で語られる中に現在形の表現が挿入されることによって、臨場感が強められている。

ウ　感覚に訴える表現が多用されることによって、祖父の実感が巧みに表現されている。

エ　三人称視点で描くことで、物語の進行が重層化し、作品世界に深みをもたらしている。

三、次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

今は昔、釈迦仏、道をおはしけるに、こがねを多く埋みたるを御覧じて、「その蛇の上な踏みそ」と仰せられければ、御弟子、「人の宝にし候ふ金こそ候へ。いかに蛇とは仰せ候ふぞ。」と申し給へば、「いさ、①我は、その金埋み持ちては蛇になるめれば、蛇と知りたるぞ。」と仰せられければ、②「げに」とこそ誰も思しけれ。

（お通りになった時に、）（「その蛇の上を踏まないように」とおっしゃったので、）（「人が貴重な財産としている黄金です。）（どうして蛇とおっしゃるのですか」）

摩訶陀国に鬼の現れ出で来て、人を食ひければ、仏、摩訶陀国におはしたれば、X逃げて毗舎離城に行きて、人を食ふ。又毗舎離城にYおはしましければ、摩訶陀国に行きて同じやうに［　　］。まことにこそ、その折に仰せられたりければ、「我行なひしことは、注1一切衆生の苦を抜かんと思ひてこそ、注2芥子ばかり身を捨てぬ所なくは行なひしか。かばかりの鬼一人をだに従へぬはあさましき事也。」と説かせ給ひければ、鬼、あとかたなく失せ惑ひて、③永く止りにけり。

（本当に、）（おっしゃったのは、）（私が修行したことは）（従えられないのは情けないことだ」）

何にも仏に少しもあひまゐらすべき。永くおはします仏にえ仕うまつらぬ、心憂し。

（お会い申さねばならない。）（遠い昔からいらっしゃる仏様にお仕えすることができないのは、情けないことだ。）

（『古本説話集』より）

注1　一切衆生……人間。

注2　芥子ばかり……「芥子」は小さいもののたとえ。ここでは「どんな小さなことでも」の意味。

問一　〰〰部ア・イを現代仮名遣いに改め、すべてひらがなで答えなさい。

問二　本文を二つの段落に分けるとすれば、二段落目はどこからですか。最初の五字を抜き出して答えなさい。

問三　═══部X・Yの動作の主体（主語）として適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

ア（釈迦）仏　　イ　御弟子　　ウ　人　　エ　鬼

問四　空欄［　　］に入る最も適当な言葉を、本文中から五字以内で抜き出して答えなさい。

問五　――部①「我は」という言葉は、どの言葉にかかりますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　その金　　イ　埋み持ちては　　ウ　蛇になるめれば　　エ　蛇と知りたるぞ

問六　――部②「『げに』とこそ誰も思しけれ」とありますが、弟子たちは釈迦の言葉をどのように受け止めましたか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　大切なものを人から隠すと底意地の悪い蛇のような者になると戒（いまし）めている。
イ　人が隠しているものを暴くと下品な蛇のような存在になると反省している。
ウ　金銭に執着していると貪欲（どんよく）な蛇のような人間になると納得している。
エ　大事な宝物の金銭を足で踏むと天罰で蛇におそわれると恐れている。

問七　――部③「永く止りにけり」とありますが、

Ⅰ　どういうことですか。説明しなさい。

Ⅱ　そうなったのはなぜですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　仏の話に心を動かされたから。

イ　仏の素早い行動に恐れをなしたから。

ウ　仏に末永くお仕えしたいと思ったから。

エ　仏から逃れることができないと観念したから。

二〇二三年度　三田学園高等学校入学試験問題　国語

解答用紙（一）

一

問一

a

b

c

d

問二

A

B

C

D

E

問三

問四

問五

問六

問七

問八

二

問一

問二

問三

問四

受験番号	
総　点	
評　点	

二〇二三年度　三田学園高等学校入学試験問題　国語

解答用紙（二）

問五

問六
Ⅰ
Ⅱ

問七

問八

問九

三

問一
ア
イ

問二

問三
X
Y

問四

問五

問六

問七
Ⅰ
Ⅱ

受験番号	
評　　点	